

2015年訪中団（廈門）の現地報告例会

自らの目で耳で肌で実感した中国

日 時 2015年12月10日 / 場 所 ホテル サンホワイト / 参加者 31名



2015年訪中団は台湾の対岸福建省（廈門）へ（10月30日から11月4日、参加者20名）日中経済交流研究会12月例会では初参加の赤木麻衣子氏（赤木法律事務所）徳岡達人氏（ソリット株式会社）と久しぶりに参加の中島宏治氏（法円坂法律事務所）の3名による報告会となりました。

■赤木麻衣子氏

国内で中国人の起業などの案件が増加し、法律事務所も国際化が避けて通れない現状だ。ただ、経営計画が杜撰なものも多く中国人の実態に迫りたく訪中団に参加した。廈門は国際都市と言われているが、西洋人や日本人も少なく、英語も通じず、国際都市なのか疑問に思った。現地法律事務所の訪問では、国家の根幹となる法律観が日本とはかなり違うことを認識した。これからの事業での私のテーマが明確になった。

■徳岡達人氏

上海、広州などは仕事で何度も訪問しているが、廈門は初めて。新規取引の案件もあり参加した。日本語学校との交流などで、中国特有の嫌な雰囲気はなく親日的に思えた。短期小ロット多品種と競争が激しいアパレル業界の中でネットショップ向けの子ども用ドレスに特化した工場は、素晴らしいビジネスモデルだと感じた。大きなところは狙わず、特化した市場を狙うべきだというヒントを得た。

■中島宏治氏

大連事務所の代表をし中国は30カ所以上視察したが、廈門は空白区だったので参加した。大連は、生産設備一式を新たに作り進出したパターンだが、廈門はもともと貿易をやっていて、その規模が大きくなり日本人が乗り込んでいった感じだ。大連と廈門の日系企業のあり方が全く違った。ただ、法律事務所の案件は労使問題、撤退問題と似ている。また、法律事務所では政治的な質問をして相手が返答に困る場面もあり、そんな遠慮のなさが同友会らしかった。ただ、訪問先に同友会がどういった組織であるのか、訪問の趣旨を明確にする必要性も感じた。

■質疑応答にて

Q、中国経済の減速は？

A、廈門は香港のような島なので、百平米のマンションが1億円するという。廈門に関しては落ち込みを感じない。不動産開発が盛んで、日系企業が製造拠点を中国から移す動きは加速するだろう。

Q、台湾との関係は？

A、以前は台商会の影響力は大きかったが、台湾人の世代交代も進み、影響力は低下している

Q、手作りの訪中団の印象は？

A、訪中委員さんの苦労がわかった。そしてアテンドくださった今中さん中西さんには感謝するばかりであった。また、手作りだからこそ、時間にルーズなドライバーや、通訳をほったらかして携帯電話に夢中なガイドが体験できたのだと思う。これも中国だと。

以上、現地視察による生々しい報告をもとに、活発な議論が交わされた例会でした。

また、訪中団参加者の訪中レポートは後日大阪同友会ホームページに掲載します。

アドレスはhttp://www.osaka.doyu.jp/b_niccyu.html



日中経済交流研究会では2月10日18時30分より「中国経済の崩壊が近づいているのか!～虚構と実態を見極め、これからの対応を考える～」をテーマに例会を行います。（場所：大江ビル）基調講演は独自のデータを基に中国経済の実態を把握されている慶応大学の植田浩史教授です。多くの参加者をお待ちしています。問い合わせは事務局泉谷まで